

広郷型ナイフ形石器について

寺崎康史¹⁾

“Knife-shaped” Stone Tools of Hirosato Type

Yasuhumi TERASAKI¹⁾

1. はじめに

北海道における後期旧石器時代の研究においては、その主要な示準的石器であるナイフ形石器の認定に関し、河東郡上士幌町嶋木遺跡（辻，1969a,b, 1973），千歳市祝梅下層（三角山地点）遺跡（吉崎，1974）の石器群をめぐって、異なるふたつの見解一ひとは肯定的（たとえば，芹沢 1971；辻，1973；吉崎，1974；千葉，1985など），他は否定的（たとえば，小林，1975；藤本，1977；矢島，1984など）一が従来発表されている。また，上記2遺跡のほかに，更別村勢雄遺跡（辻，1977），常呂町岐阜第二遺跡（藤本，1977），千歳市美沢1遺跡（北海道教育委員会，1979），帯広市帯広空港南A遺跡（後藤，1983），同上似平遺跡（佐藤・北沢，1987）などの北海道第I期（小林，1975）に位置づけされる遺跡の調査がなされたが，ナイフ形石器そのものについての議論を進展させる結果とはならなかった。しかし，近年になり，新たな展開を生じさせる遺跡の調査が相次いでなされた。ひとつは函館市桔梗2遺跡から「ナイフ様石器」と剥片を中心とした石刃を伴わない石器群が発見され，接合資料による剥片剥離過程の検討から米ヶ森技法との類似性が指摘され，立野ヶ原系石器群との関連性が考えられている（石川・長沼，1988）。類似した石器群は清水町共栄3遺跡においても出土した（山原，1992）。これらの新知見による石器群は前述の北海道第I期の石器群を含めて，台形様石器群として捉える論考がなされている（佐藤，1991a,b；山原，1993）。一方，北海道北東部の北見市広郷8遺跡からは両側縁に調整加工が施される明確なナイフ形石器が発見された（宮，1985a,b）。「広郷型ナイフ形石器」と命名されたこのナイフ形石器は，北海道西南部の今金町神丘2遺跡において追認された（寺崎，1990）。両遺跡は，鍵層となる火山灰（たとえば恵庭a降下軽石層，支笏降下軽石堆積物など）を含まず，理化学的年代測定法によるデータにも乏しいが，細石刃文化以前の北海道第I期に含まれる可能性がある。

北海道の細石刃文化以前の石器群に関しては，整理しなければならない課題が数多く残されているが，小稿では，「広郷型ナイフ形石器」を取り上げ，その形態的特徴を明らかにし，今後の研究の一助としたい。

2. 広郷型ナイフ形石器について

広郷型ナイフ形石器は北見市広郷8遺跡から出土した石器に対して宮（1985a,b）が型式設定した。その特徴は，打面転移を頻繁に行なうことによって生み出された不定形の剥片を素材として，両側縁

¹⁾ 今金町博物館建設準備室。The Preparative Office of Museum in Imakane, Imakane, Hokkaido, 049-43 Japan.

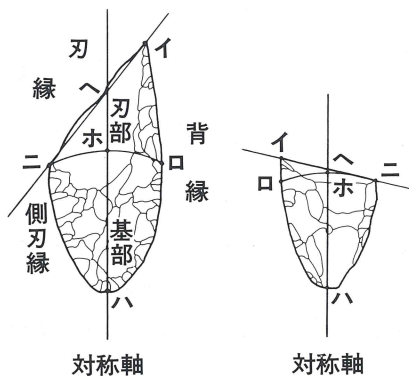
および基部にブランディングを施し、打瘤部を除去することとされ、また、本州地方のナイフ形石器と決定的に異なる点として急峻ではないブランディングが指摘された。

宮（1985a,b）の型式設定では、ナイフ形石器の素材がどのような剥片剥離の過程において得られるのか技術的な検討を経ていない点、また、素材と調整加工のつながりが形態的な特徴として明確にされていない点で問題が残ろう。

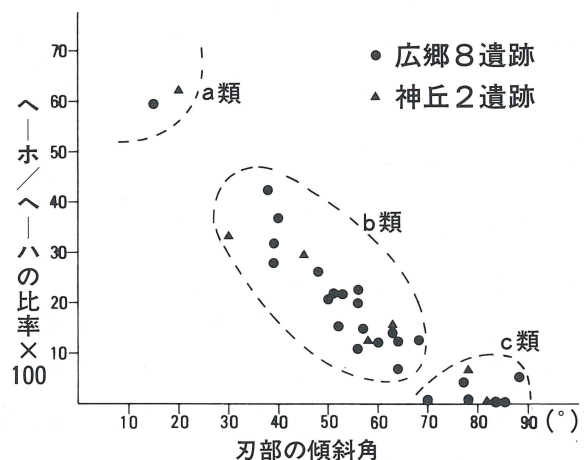
このため今回、広郷8遺跡におけるナイフ形石器の形態的特徴を以下のようにとらえた。なお、形態把握のための測定は竹岡（1989）によった。

広郷8遺跡においては、資料を実見した範囲では38点のナイフ形石器があり、ほとんどが両側縁に調整加工が施されたものである。石質はすべて黒曜石である。まず、対称軸（ヘーハ）を決定し、次にヘーホ／ヘーハの比率によって全体的な形状を示す（第1図）。また、（ヘーハ）と刃部（イーニ）とのなす角度によって刃部の傾斜を示す。これによって以下の3類に分類される（第2図）。

- a類 先端部は尖鋭で、刃部が長い。
- b類 先端部の角度は鋭く、刃部は短い。
- c類 鋭い先端は作出されない。



第1図 基本形態の把握と各部の名称

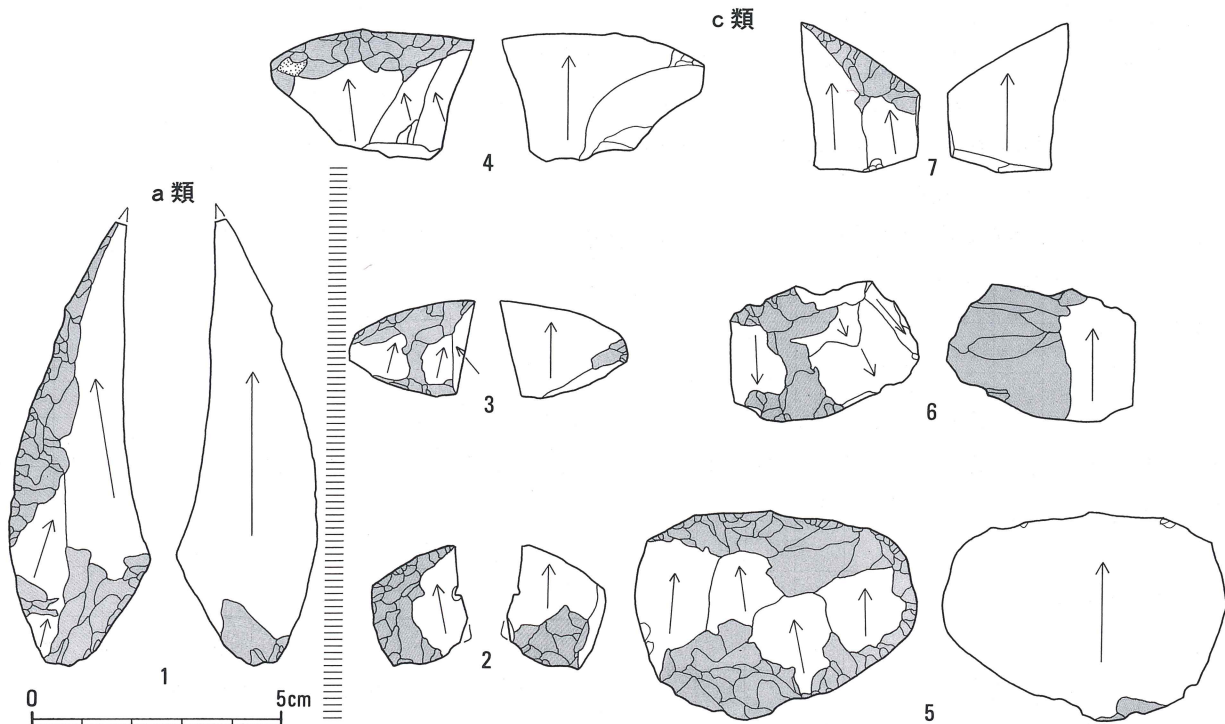


第2図 全体形状の分類

次に概形によって大別された前述3類はどのような素材を用い、それをどのように調整しているのかを見てみよう。

広郷8遺跡では、a類は1例のみである（第3図1）。素材上、先端部を上位に設定し、右刃である。背面は先端部付近を除いて平坦な調整加工により整形している。腹面には打瘤部を除去するような平坦な調整加工が施され、基部は丸みを帯びる。全体として素材をあまり変形させることなく、先細りの縦長剥片を素材として用いている。残された素材面の剥離方向の一定性より石刃とみなせる。

b類は28例あり、そのうちの完存品18例を図示した（第4図）。すべて横長の剥片を用いている。素材の基部または末端に刃部を設定するものではなく、素材の右位もしくは左位に刃部を設定する共通性をもつ。右刃と左刃はほぼ同数ある。右位のものは右刃が多く、左位のものは左刃が多い。これは、整形上素材の変形が最小限ですむためと思われる。調整加工は、背面では刃部を残し、全面が調整加工によって覆いつくされるもの（第4図4,13,14,16）、刃部と素材の剥離面の一部を残し、面的に調整加工が施されるもの（第4図1,3,7,8,15,17）、周辺部にのみ調整加工が施されるもの（第4図2,5,6,9,10,11,12,18）の三者があり、前二者は平坦な調整加工によっている。腹面では、右位右刃、左位左刃のものは基部側が調整されているものが多い、また打瘤部の除去と思える調整が施される例がある。右位左刃、左位右刃のものは素材末端側に調整加工が施される例が多い。右位、左位、右刃、左刃を問わず側刃縁側に腹面調整される例が多いといえる。基部はいずれも丸みを帯びるように整形される。



第3図 広郷8遺跡におけるa類, c類のナイフ形石器 (網点部は調整加工部位)

c類は6点あり、横長剥片が主体である。第3図3は素材となる剥片を切断した後、切断面から背面に向かって調整加工が施されている。第3図4では一側縁が切断されており、二側縁加工のものとするには疑問もあるがc類に含める。第3図7は石刃が素材と思われる。

ここで、北海道内において唯一「広郷型ナイフ形石器」の類例が認められる今金町神丘2遺跡のナイフ形石器を同様の視点により観察してみる。

神丘2遺跡においては、14点のナイフ形石器が出土し、両側縁に調整加工が施されたもの、および基部付近にのみに調整加工が限られるものに二大別される。前者は9点、後者は5点認められ、石質はすべて硬質頁岩である。

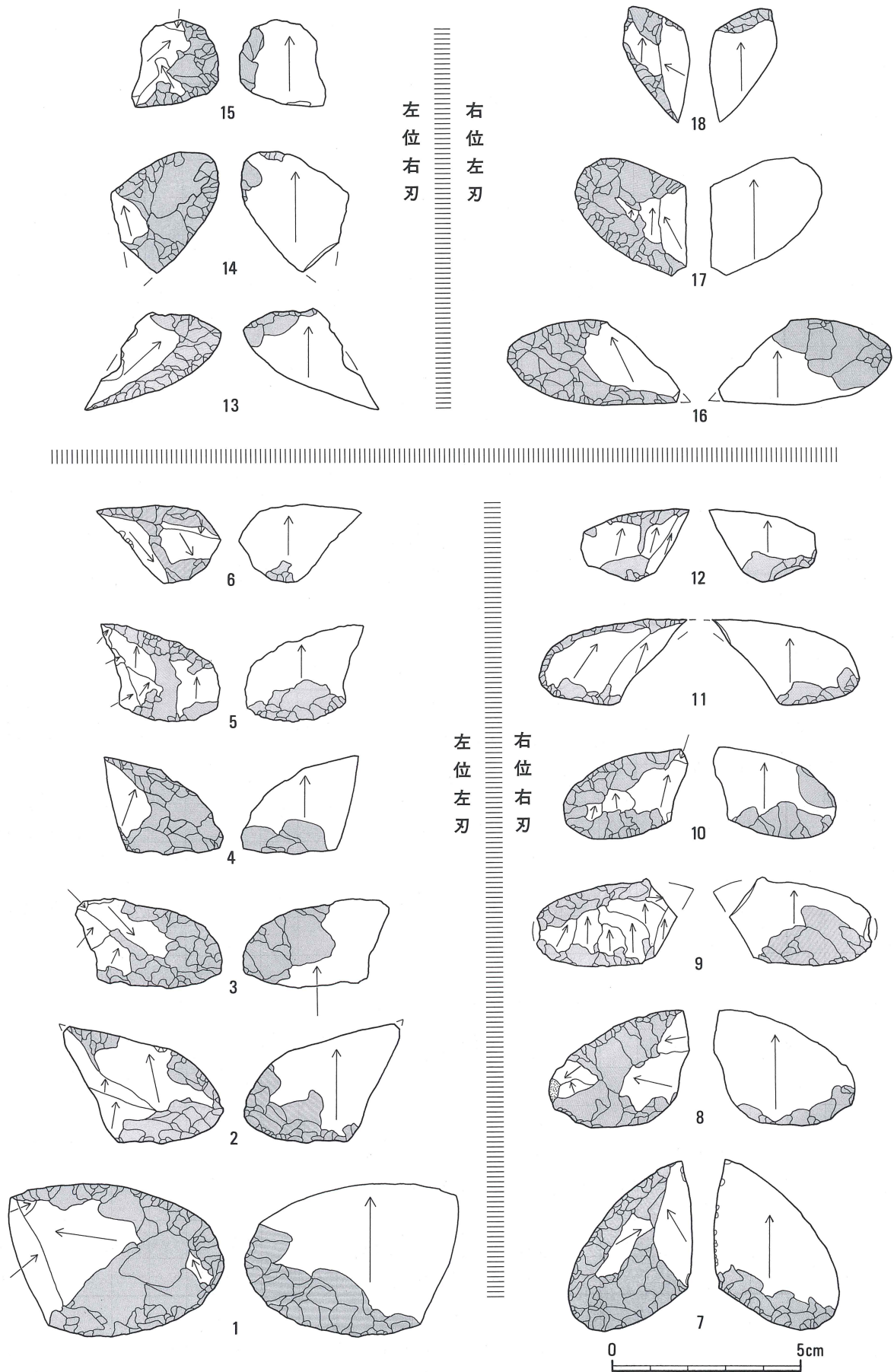
両側縁に調整加工を施すものの形態に関しては、神丘2遺跡においてもa類・b類・c類の三者が認められる(第2図, 第5図)。

a類は1例のみで、背面に礫面を持つ縦長剥片を用いている。石器先端部は素材上、上位に設定し、右刃である。背縁は急角度な調整により素材を断ちきるような加工が施されている。側刃縁および腹面は平坦な面的調整により丸みを帯びた形に整形されている(第5図1)。

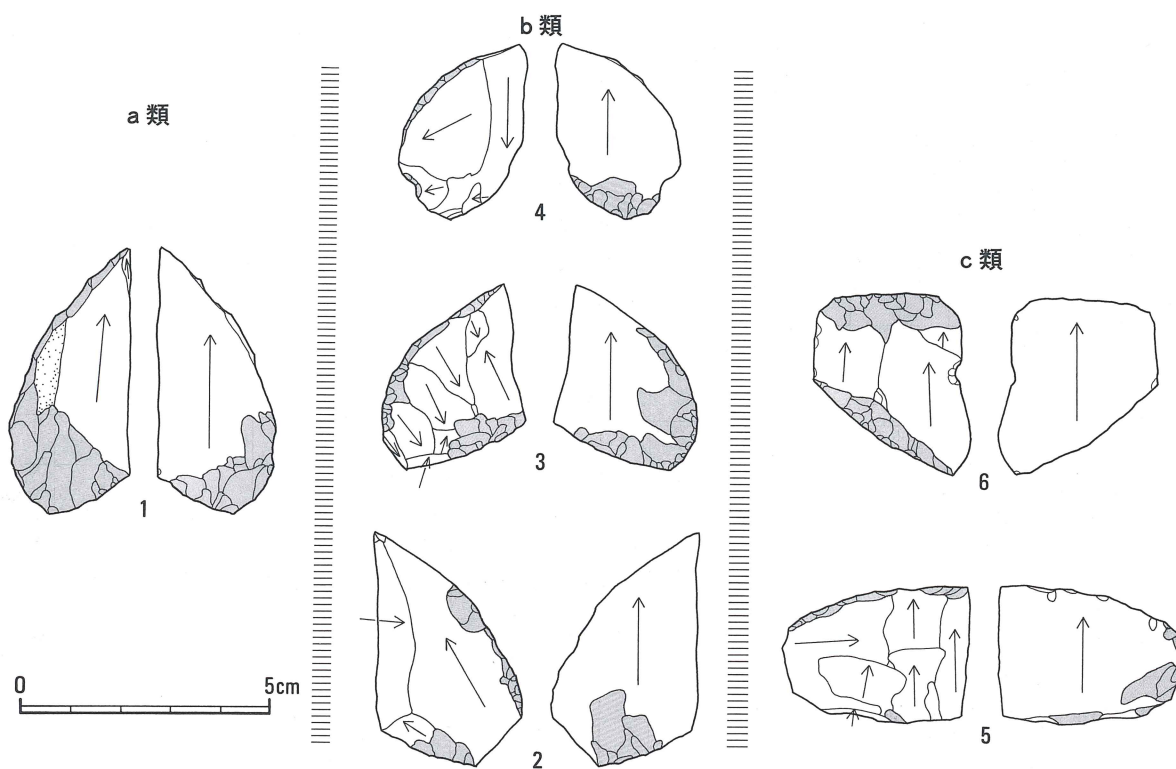
b類は広郷8遺跡に見られた背面を覆いつくす面的な調整は見られない。素材の変形度は少ないといえる(第5図2, 3, 4)。

c類は台形石器といえるもので、第5図6は末端がヒンジフラクチャーになっており、打点部もそれほど遠くはなく、寸づまりの剥片を素材としている。第5図5は基端部に切断面がみられ、その切断面に背面から調整が加えられる。

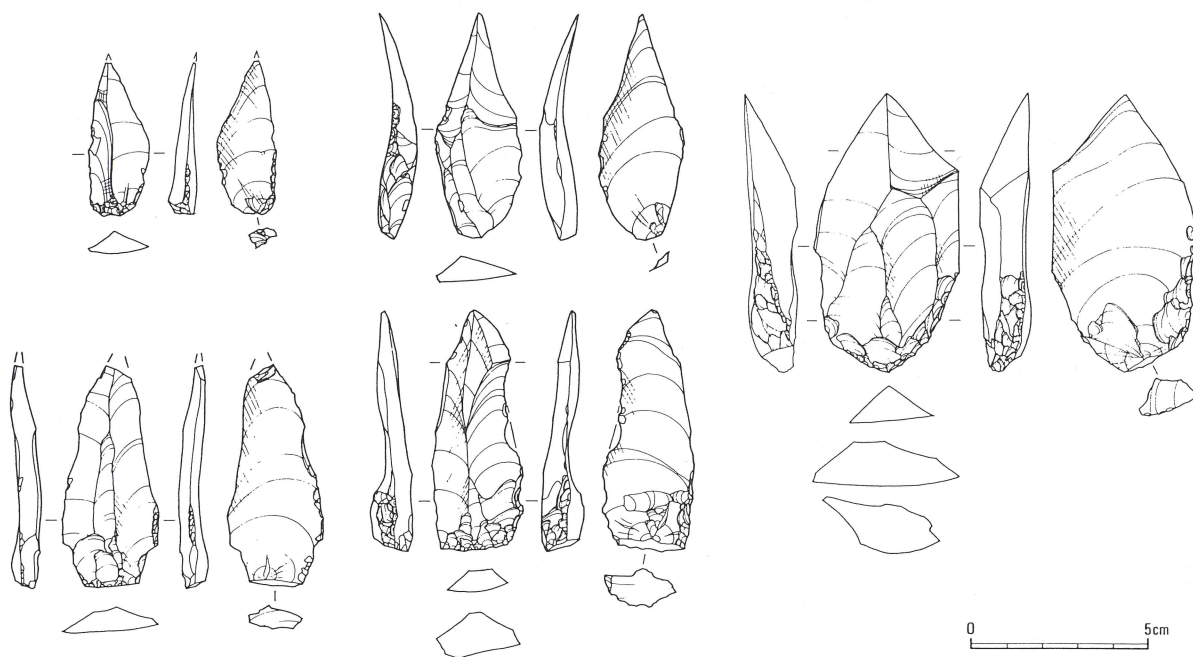
ところで、神丘2遺跡においては、両側縁加工のもの他に北海道では未だ類例のない基部加工のナイフ形石器が出土した(第6図)。石刃が素材であり、打点部を基部として、石器先端部は上位に設定している。打面を残し、その多くは単剥離打面である。



第4図 広郷8遺跡におけるb類のナイフ形石器 (網点部は調整加工部位)



第5図 神丘2遺跡におけるナイフ形石器 (1) (網点部は調整加工部位)

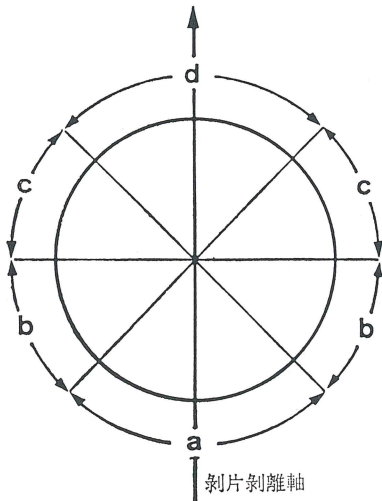


第6図 神丘2遺跡におけるナイフ形石器 (2)

3. 広郷型ナイフ形石器をとりまく剥片剥離技術

前項のようにそれぞれ類別されたナイフ形石器がどのような剥片剥離をもって生産されたのかを以下に述べる。

a類はいずれも石刃といえるもので、両遺跡とも石刃核は出土していないが、石刃、使用痕のある



第7図 ナイフ形石器背面の剥離痕の方向 (竹岡, 1989)

石刃, 石刃を素材とした石器などが共伴していることから石刃技法は存在したといえる。広郷8遺跡の石刃は単剥離打面をもつものが多い。これは石刃以外の剥片においても共通して言えることである。神丘2遺跡においては, 石刃の背面の観察および接合資料から両設打面をもつ石刃技法であったと考えられる。打面は調整されている。

b類・c類では, c類の一部に石刃を切断して調整を加えたものもあるが, 他は横長剥片を用いている。ここで, 剥片正面に残された素材の剥離痕の方向区分(第7図)に基づいてその頻度をまとめると第1表ようになる。主要剥離面と同方向の剥離のみで構成されるものが多く, 特に刃部の剥離方向のみを取り上げた場合, 主要剥離面と同方向のものが多く, 刃部を意図的に設定していることが理解される。このことから宮(1985a,b)の言うような「打面転移が頻繁に行なわれている」剥片剥離よりは同一打面による同方向への剥片剥離を考えたほうが合理的である。ひとつの打面から求心的に剥離が進む相似た石核が両遺跡より出土していることもこの

考えを支持しているといえるだろう(第8図)。これらの石核からは初期の段階においては縦に長い剥片(石刃)の剥離が予想でき, 漸次石核の高さを減じ, 横長の剥片が剥離されるという一連の過程を考えることができる。広郷8遺跡ではサイコロ状を呈する石核が多数報告されているが, このうち筆者が観察しえた中で14個体に被熱により火バネを起こした剥離面が確認できた。すべてを観察してはいないので断言はできないが, これらのサイコロ状の石核をもって広郷型ナイフ形石器の素材を剥離したものとすることはできない。

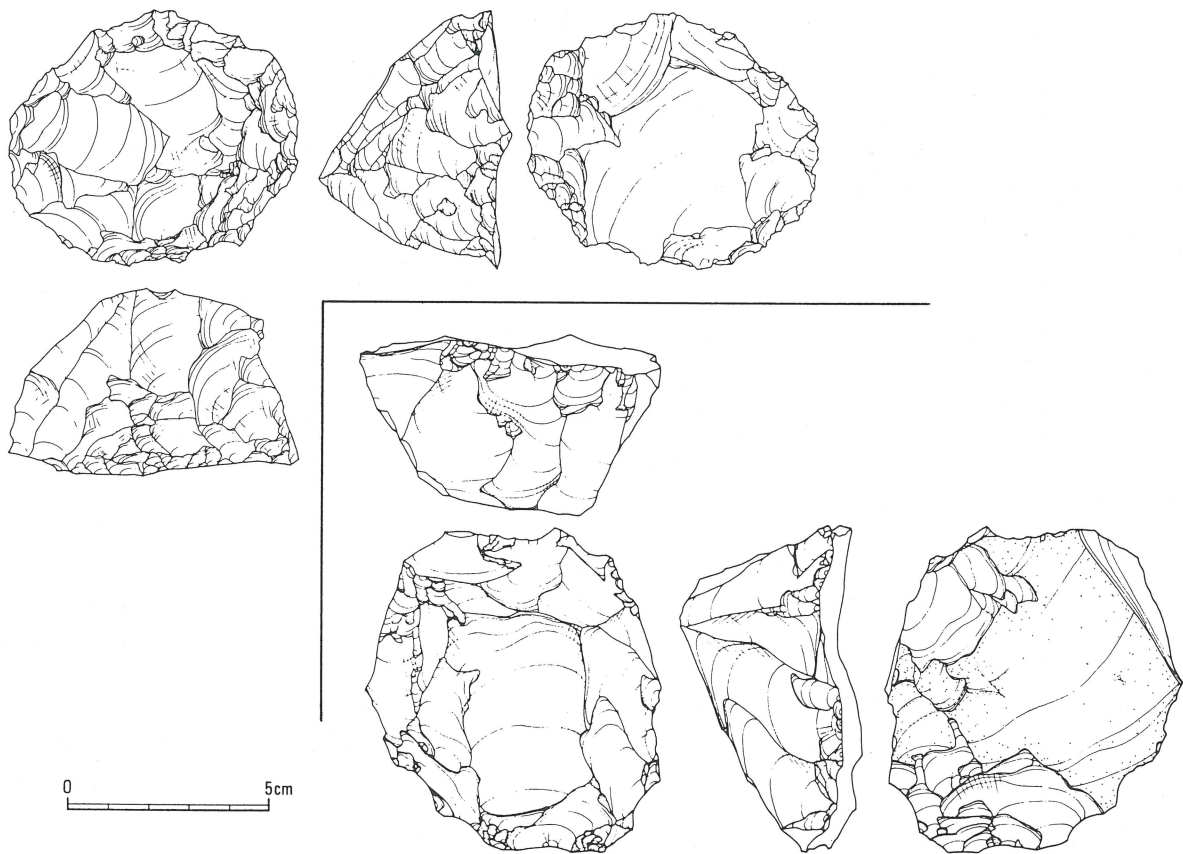
第1表 広郷8遺跡のナイフ形石器背面に残る剥離痕の方向

		刃部のみ	
		1 2	1 7
イ	aの方向のみ	1 2	1 7
ロ	a + b, b	9	6
ハ	c + a, c + b, c + a + b, c	3	3
ニ	d, d + a, d + b, d + c, d + a + b, d + a + c, d + b + c, d + a + b + c	3	1

4. まとめ

広郷8遺跡においてはじめて確認されたナイフ形石器は素材・刃部形状から以下の三者に分類できる。すなわち, 縦長の剥片(石刃)を素材とし, 側縁を刃部とした尖鋭な先端部をもつもの, 横長剥片を素材とし, 側縁を刃部とした刃部形状が斜刃をなすもの, 縦長剥片または横長剥片を素材とし, 素材の側縁を刃部として平刃をなすものである。この三者の素材は一連の剥片剥離工程の中で生産される可能性もあり, 調整加工は平坦な面的調整が背面側縁および腹面基部周辺に共通して施されることから, 同一の技術基盤のなかで理解されるものである。中でもb類としたものは量的にも他類を凌駕し, 安定した製作技術を示している。すなわち, 宮(1985a,b)の「不定形な剥片」というよりはかなり規格性をもった剥片を素材としている。

神丘2遺跡においても両側縁加工のナイフ形石器については同様の形態的特徴を備えている。地理



第8図 広郷8遺跡の石核（上）と神丘2遺跡の石核（下）

的に離れた北海道北東部と西南部の遺跡において共通の形態を持つ石器群があるということは、ある空間的広がりをもってより多くの遺跡が分布する可能性を示唆する。

北海道における旧石器時代編年のなかでこれらのナイフ形石器をどのように位置づけるのかは大きな問題である。広郷型ナイフ形石器を関東地方のIV中～上層段階に位置づける考えがあり（田中，1987），一方関東編年のVII層～VI層段階に位置づける考えもある（佐藤，1991b）。現段階では資料があまりにも断片的すぎるので明確なことはいえないが，細石刃石器群以前の北海道第I期に関する諸問題を整理することがこのことを考える端緒となると思われるので，以下の二点について筆者なりの考えを述べておわりとしたい。

本稿においてナイフ形石器c類としたものは台形様石器ととらえることができる。他の第I期の台形様石器との系譜が考えられるので，型式学的研究をさらに進めこれらの関係を明らかにする必要がある。広郷8遺跡と神丘2遺跡の石器群では，ともにほぼ全周に調整が及ぶ搔器が共通して組成している。神丘2遺跡において円形搔器と分類したものである。これらに類似した石器は嶋木遺跡からまとまって出土しており（筑波大学嶋木遺跡調査グループ，1988），他の第I期の遺跡においても注意する必要がある。

また，吉崎（1967）により設定された石刃を主体とする前期白滝文化は細石刃文化以前に位置づけられているが，北海道の旧石器時代研究が開始され，40年が過ぎようとしているが未だに類例は増えておらず，編年的な位置づけについて再考する余地がある。筆者は今金町美利河1遺跡C地点の

出土遺物の観察から、石刃のなかでも打面が小さく反りが少ない長大なものは、細石刃石器群以降の所産であろうと考えている。前期白滝文化とされる石器群がより新しく編年されるなら、その空隙を埋めるものとして「広郷型ナイフ形石器」を含む石器群が位置づけられる可能性もある。

謝辞 本稿を執筆するにあたっては、奈良国立文化財研究所松沢亜生氏、帯広百年記念館北沢 実学芸員、山原敏朗学芸員、旭川市教育委員会友田哲弘氏にご教示を賜った。資料実見に際して北見市北網圏文化センター久保勝範館長、太田敏量学芸員に便宜をはかって頂いた。また、文章表現については北海道教育大学岩見沢校山口義寛教授に御指導いただいた。以上の方々に記して謝意を表したい。

なお、本稿は平成3年度北海道科学研究費補助金交付個人研究「北海道のナイフ形石器の研究」の成果の一部である。

文献

- 千葉英一, 1985, 日本の旧石器一第1回一. 考古学ジャーナル, 245, 20-25.
- 後藤聡明, 1983, 北海道帯広空港南A遺跡. 北海道十勝支庁. 31 p.
- 藤本 強, 1977, 岐阜第二遺跡. 常栄会. 100 p.
- 北海道教育委員会, 1979, 美沢川流域の遺跡群Ⅲ. 525 p.
- 石川 朗・長沼 孝, 1988, 桔梗2遺跡. 北海道埋蔵文化財センター. 324 p.
- 小林達雄, 1975, 概説. 日本の旧石器文化, 2, 4-13.
- 宮 宏明, 1985a, 広郷8遺跡(Ⅱ). 北見市. 191 p.
- , 1985b, 広郷8遺跡のナイフ形石器. 考古学雑誌, 第71巻第1号, 75-87.
- 佐藤訓敏・北沢 実, 1987, 帯広・上似平遺跡2. 帯広市教育委員会. 68 p.
- 佐藤宏之, 1991a, 日本列島内の様相と対比. 石器文化研究, 3, 129-140.
- 芹沢長介, 1971, 旧石器時代の諸問題. 考古学ジャーナル, 53, 2-12.
- , 1991b, 東北日本の台形様石器. 東京都埋蔵文化財センター研究論集, X, 1-48.
- 竹岡俊樹, 1989, 石器研究法. 言叢社. 366 p.
- 田中英司, 1987, 埼玉の石器と北海道の石器. 埼玉の考古学, 13-27.
- 寺崎康史, 1990, 神丘2遺跡. 今金町教育委員会. 168 p.
- 辻 秀子, 1969a, 上士幌遺跡—第1次報告—. 帯広畜産大学学術研究報告第Ⅱ部, Vol.3 No.4, 70-99.
- , 1969b, 上士幌嶋木遺跡—第2報—. 郷土の科学, 64, 8-16.
- , 1973, 北海道上士幌嶋木遺跡の調査報告. 石器時代, 10, 39-71.
- , 1977, 勢雄遺跡. 更別村教育委員会. 109 p.
- 筑波大学嶋木遺跡調査グループ, 1988, 北海道河東群上士幌町嶋木遺跡の石器文化. 筑波大学歴史人類学系紀要 歴史人類, 16, 340-279.
- 矢島国雄, 1984, 先土器時代. 北海道考古学, 第20輯, 3-27.
- 山原敏朗, 1992, 上清水2遺跡・共栄3遺跡・東松沢2遺跡・北明1遺跡. 北海道埋蔵文化財センター. 378 p.
- , 1993, 北海道における台形様石器を伴う石器群について. 潮見浩先生退官記念論文集, 33-44.
- 吉崎昌一, 1967, 考古学からみた日本人. 遺伝, 21-1, 14-18.
- , 1974, 祝梅三角山地点. 千歳市教育委員会. 55 p.